

リレーコラム

酪農を消費者につたえる意味とは

私のゼミ学生とともに農山村へ出かけたときは、ただ話を聞かせるだけではなく、なるべく農業や酪農体験などの機会づくりをしている。所属している学生の多くは、専攻の趣旨を理解しているので、農業や農村にもとから関心が高い者が大半である。そんな学生らとともに、清里のキープ牧場（ジャージー種の放牧型酪農）にて農場見学と作業体験を行ったことがあった。学生らは、牧場で掃除や給餌体験を行い、搾乳の様子を見学し、ジャージー乳のおいしさを味わい、その乳を使ってバターづくりを楽しんだ。その際、こんなふうに嬉しそうに言われた。

「先生、まるで“牧場物語”みたいです！」と。

“牧場物語”とは、プレイヤーが農場主となって農畜産物を生産し、販売活動をするなど農業経営を行うシミュレーションタイプのゲームソフトである。ゲーム内では、ビニールハウスで時期以外の農業生産を行うこともできるし、生産した農産物や釣ってきた魚を使って料理をすることも可能だ。そして、プレイヤーはゲーム内で恋愛し、結婚して家族を設けるなどライフイベントも用意され、人生のサイクルを体験できる。同作は1996年に第1作目が発表されて以降、家庭用コンシューマーゲーム機での展開を中心に、近年はブラウザゲームやスマートフォン用ゲーム化まで媒体が広がり、関連作品まで含めると2017年までに40作を数える人気作品である。“牧場物語”をプレイした若者らは、バーチャルの世界でだが、農作物や動物の世話をする一連の流れを辿り、その生産物を収穫し、食し、販売する楽しさを味わっているのである。

ゲーム“牧場物語”から、現実の体験を想起する学生がいるように、現代の子供・若者のなかには、農や食のつながりを自身と身体的にリンクできないことや、リアリティを持っていないという子も少なくない状況である。実家が農業をしている子でも勉強や部活に追われて、家の畑にはほとんど近づいたことがない場合もある。

その反面、「おもひでぼろぼろ」や「銀の匙 Silver Spoon」など農業・農村を描いたアニメや漫画作品が生まれ、先述した「牧場物語」だけではなく、「ハコニワ」、「ルーンファクトリーシリーズ」、「ブラウンファーム」など農業生産をシミュレーションできるゲームが続々とリリースされている。

これまで若者が好む物語やゲームは、宇宙で異星人と戦うSFものや、架空のファンタジー世界を描いた作品など、完全に私たちの生活から切り離された非日常を描いたものが多かったように思う。だが、かつては当たり前だった農業や農山村の暮らしの方が現代の子供や若者たちにとっては、SFの世界の非日常性と同じくらいに、もはや「ファンタジー」の世界になっているのかもしれない。

農林水産省『我が国の食生活の現状と食育の推進について』（2013年）によると、「農林漁業体験を経験した国民の割合」は31%であるという。2000年からは学習指導要領が適用される学校で実施された「総合的な学習の時間」が開始され、2005年の食育基本法施行以降、農業体験学習は学校教育のなかで取り込まれるようになった。しかしながら、実態的な取り組み参画や、消費者自身の認知状況には大きく成果を見せていないことが分かる。

酪農体験に焦点を絞ってみると、中央酪農会議の平成24年度受入実態調査報告によると、酪農教育ファームの認証牧場を訪問した小学校数は1,973校、中学校が1,015校であった。文部科学省の学校基本調査の学校数をもとに試算すると、小学校で9.2%、中学校で9.5%の学校が酪農教育ファームを訪問していることになり、先に挙げた耕種が中心であろう農業体験よりも機会の割合が減少することになる。

以上より、数字のうえでの話だが、国民の7割近くが経験したことがない農林漁業体験、児童・生徒らの9割は訪問したことがない酪農の現場という結果は、生産の場に触れ合う機会が乏しい現状であることが分かる。この結果は、農業・農村での暮らしや仕事は我々の生活から遠くなり、まるで「ファンタジーの世界」と言っても過言ではない状況であることを示している。



高崎経済大学地域政策学部 准教授 片岡 美喜

英国へ調査に行った際に訪問する機会を得た「シティファーム」、「スクールファーム」、「コミュニティガーデン」の取組は、都市部においても自然や生き物と触れ合える場として有効なものであった。いずれも都市型農業の一環であり、作物の栽培を行い、市民農園（アロットメント）から派生した「コミュニティガーデン」、より多くの人に開き、家畜の飼育を行う「シティファーム」、「スクールファーム」が存在する。現在では、これらを統括する全国組織も誕生しており、英国内に120あまりのファームと、1,000あまりのコミュニティガーデンが存在している。

これらの取組の端緒は都市部の遊休地対策や、地域運動のムーブメントとともに成長し、都市環境の改善や、食料安全保障、労働者や貧困層などの地域の抱える課題へのアプローチなど、多彩な目的をもって運営されている。「シティファーム」では、NPO等地域の組織によって運営され、運営経費は企業や賛同者のチャリティや、グッズ販売やカフェ運営など自家経営などのファンドに支えられている。私が訪問したシティファームでは、牛や馬などの家畜の世話を近隣の大学生がボランティアで行っていた。若者らも学業の合間に動物と触れ合い、多様な年代の人々との活動を楽しんでいるようだった。

写真にあるマッドシュート・パーク&ファームは、ロンドンの東に位置し、銀行や証券会社などビジネス街の近隣に立地している。都市の喧騒から少し離れたところにある農場と公園は約13haあり、そのなかには公園部とともに牧場部が存在する。牛、豚、羊、ヤギ、ロバ、鳥類、小動物類などが飼育され、訪問者は自由にそれらの動物を眺め、触れ合うことができる。

飼育されている家畜の多くは、英国原産であるものや、国内酪畜業でも代表的な品種が飼われている。例えば、英国内での品種では最も小さいデクスター牛、ポピュラーな羊の品種であるオックスフォードダウンシープなどと間近に触れ合える。訪問時は昼過ぎであったが、小さな子供を連れた母親が多く訪れており、子ども達も動物と間近に触れ合える機会を得ていた。

こうした光景を眺めるにつけ、英国の場合は農的環境や牧場はゲームや漫画のなかの世界ではなく、自分が住む隣に存在しているものなのだと感じるようになった。

日本国内に目を移すと、都市型畜産・酪農業はわずかであり、身近に家畜類と触れ合い、牧場を体感できる機会は限られてきた。だが、酪農教育ファームの取組をはじめ、消費者と触れ合う機会は徐々に拡大されている。

農場に人を入れることは伝染性疾病の問題があり難しい場合もあるが、現状の傾向を歓迎しつつ、消費者と触れ合う機会を一層作っていただきたいと感じている。現場の皆さんには、ご自身が「この牛乳の先には牧場と、そこで働く人がいる」、「自分の生活の身近に牧場を感じる」と若者に感じさせるような存在であることを認識して、その価値を自信を持って伝えていただきたいと、大学の一教員から切にお願いしたい。



写真 英国のマッドシュート・パーク&ファームの様子（筆者撮影）
ビル群に近接して、生き物と触れ合えるシティファームが存在している。